

基 調 報 告

「調査者/被調査者」関係の現代的位相 ——「似田貝-中野論争」の先にあるもの——

三浦 倫平

はじめに

横浜国立大学の三浦と申します。よろしくお願いします。去年も呼んでいただきましたので、2年連続ということで光栄です。かなり大きな題目を設定してしまいまして、羊頭肉肉になってしまう不安もあるのですが、始めさせていただきます。解題報告にもありましたように、調査者と被調査者の関係性は、社会科学や社会学にとって基本的ではありますが重要で、しかも奥が深い問題ではないかと思っています。今日は、これまで私なりに考えてきたことをお話しさせていただければと思います。

今回のワークショップでひとつの大きな軸になっているのが、「似田貝-中野論争」における「共同行為」というものです。社会学を勉強している人、特に院試などを勉強する学生は、かつて「似田貝-中野論争」というものがあり、そこで「共同行為」ということがテーマになっていたことを知るわけですが、読み始めのころには十分には理解できない人が多いのではないかなと思います。そして、院生になって自分で責任をもって調査をし始める時期になると、「似田貝-中野論争」をあらためて読む人はあまりいないのかなと思います。特に私も院生の若いころはそうだったのですが、しかし今あらためて「似田貝-中野論争」を読むと、読み返すたびに発見があるというか、非常に面白いと思うわけです。

今回のお話をいただいて「似田貝-中野論争」を読み返していたんですけども、ふと、あることに気付いたんですね。それは似田貝香門先生と中野卓先生の年齢差です。中野先生は、似田貝先生のひとつ上の世代ぐらいなのかと漠然と思っていたのですが、23歳も年齢が上なんです。23歳の差というのは、たとえば私と町村敬志先生くらいの差です。誤読だったとしても、私が町村先生から厳しい批判をされたら、ちょっと夜も眠れないと思います(笑)。あとでお話ししますが、似田貝先生は、「共同行為」と言ったことで、中野先生から誤読であったとはいえ厳しい批判にさらされたことについて、少し悔しかったのだらうとも思いますし、そのことはずっと頭の片隅にあって、「共同行為」というものをどう具体化しようか、内実化しようかということを考えていたのではないかなと思います。そう考えると、「似田貝-中野論争」というのは、論争それ自体を見ることももちろん大事ですが、その後、似田貝香門という若き社会学者が自ら打ち出した新たな方法論をいかに肉付けしていったのかということを見ていくことも、現代の「共同行為」を考えていくうえで、ひとつ大事ではないかと思っています。本報告のポイントのひとつは、この格闘のあゆみを見ていくという部分にあります。

もうひとつ。似田貝先生とは今も一緒に研究させていただいていますが、似田貝先生の「共同行為」論を私がそのまま受け継いでいるわけではないですし、受け継ぐほどの能力もありません。ただ、それなりに自分でやってきた部分もあって、自分が調査をしていくなかで考えてきたことを後半でお話しして、このあとのお2人の先生にバトンタッチしていきたいと思って

います。ですから、理論的な話が多くて少し難しいかもしれません。報告としては、最初に「似田貝-中野論争」の概要をお話して、そのあとで、これまでの学史的な研究があまり光を当ててこなかった、「論争」後の似田貝の「共同行為」の試みについてお話して、そこから現代の社会調査にとっての重要な論点を導き出したいと思います。そこで終わったほうが本当はすっきりするんですけど、最後に、これまで私が四苦八苦しながら調査をしてきたなかで考えてきたことをお話しできればと思います。

「社会調査の曲がり角」論文の問題提起

まず、「似田貝-中野論争」の概要について、簡単にお話ししたいと思います。さきほどの解題報告にもありましたが、「論争」とは言われるんですけど、実は直接的なやりとりがあったわけではないんですね。1974年に似田貝が出した「社会調査の曲がり角」という論文¹があるんですが、それに対して、中野が怒濤のごとく批判をして、そのあと突然、第三者の安田三郎が出てきて、それを「論争」というかたちでまとめたという図式になります。そのあと似田貝は、これに関連することを論文のなかで書いてはいくんですが、中野に対する反論や安田に対する反論みたいなことを直接的にはしていませんので、厳密な意味での論争ということではないと思います。

「論争」の発端となった似田貝の「社会調査の曲がり角」論文ですが、この1974年の論文で似田貝は、「社会調査をするのが難しくなってきた」、「社会調査は、今、曲がり角にある」という問題提起をするわけです。つまり、被調査者が調査者に「あなたは、どういう立場で調査をするんですか」、「この調査はどんな意味があるんですか」ということを強く問うようになってきたということを言います。もしかすると、今ではこういった問いかけはよくあるのかなとも思うんですけど、この論文が出る前の社会調査、特に村落調査のような調査では、言い方はすごく悪いけれども、大学の偉い先生がドンとやってきて「調査するぞ」と言って調査をするみたいな、そういう調査がおこなわれていました。だけれども、そのような調査手法では、住民運動のようなものの調査や研究はできないわけです。

このような被調査者からの問いかけは、「調査者の役割そのものを根底から問うているのだ」と、似田貝は位置づけています。どういうことかという、『ラポール』と言って調査者は形式的にはすごく行儀よく礼儀正しく被調査者に接するけれども、結局、出てくる論文は学術的な用語が散りばめられた、被調査者のリアリティを全然捉えていないものが多い、という事に対する批判なんだ」ということです。さらに、「われわれのリアリティと学問の世界のズレみたいなものに関して焦りとか苛立ちとかそういうものを全然抱えていないじゃないか」と、「なぜそのようなズレが起きるのかみたいなことには関心がないじゃないか」と。住民運動というのは都市計画や公害などを問題にしていたわけですが、「研究者はいろいろ調査はするけれども、結局のところ都市開発はどんどん進み、われわれの生活はどんどん苦しくなっているのに、そういった状況の改善に研究者は全く関心を持っていないじゃないか」と。被調査者からの社会調査に対する問いかけというのは、そういう問いかけなんだと似田貝は言うわけです。これは社会学者にとってみれば、今でも耳が痛い指摘ではないかと思います。

中野による似田貝批判

社会科学者が被調査者のリアリティに関心がないとか、そのズレに興味がないみたいなこと

¹ 似田貝香門、1974、「社会調査の曲がり角——住民運動調査後の覚書」『UP』24: 1-7.

が、なぜ起こるのかということについて、似田貝は次のように言っています。つまり、それまでの社会調査の認識は、調査者である研究主体と被調査者である研究対象（客体）とを完全に分離させている。したがって、あたかも自然科学の実験のように中立的・客観的に研究対象を扱わなければいけない、研究主体が研究対象に関与してはいけないし干渉してはいけないという認識がある。そのため、別にそこで研究主体と研究対象の間でリアリティにズレがあったとしても、それは調査者の問題ではないということになっているのだと言っています。

ですが、実際は、住民運動の事例に代表されるように、調査対象となる人々は単なる客体に過ぎないというわけではありません。被調査者は、この調査者がどのような人なのか、どのような問題意識を持っているのかということを見て、話をするわけですね。だから、自然科学の実験のように社会調査はできない。調査者という主体が全く影響を及ぼさないなどということはあり得ないからです。常になんらかの影響があるということを常に認識に置いておかなければいけないということを言っているわけです。特に住民運動をしている人たちは、いろいろな問題を抱えていて、それに対して理論武装をして、いかにその問題を指摘して権力と対峙しようかと考えている人たちなので、単なる客体の位置に留まろうとしているわけではありません。「主体」であるわけです。

しかも、そういった人たちは、研究者との「共同行為」を願っている、渴望している。それに対して研究者はどう応えていけばいいのだろうかということも、似田貝は問題提起します。これは「似田貝-中野論争」でよく間違われることですが、『研究者が共同行為をやりましょう』と似田貝は言ったんだと誤解されますが、それは違います。「研究者は共同行為を渴望されますよ、それに対してどうしますか」ということを似田貝は問題提起していたわけです。ですから、中野の批判というのは、その点で少しずれています。

そういった渴望に対して研究者はどうしていけばよいのかということについて、似田貝は「社会調査の曲がり角」論文のなかで2つほど、こういうことが必要ではないかということを行っています。そのひとつが「コミットメント」というものです。「大衆のなかの今日の文化形成の担い手や問題提起者の動きに、研究者自身が少なくとも一つでもコミットメントしていく必要がある」（似田貝 1974: 7）と。2つ目は、「個別・具体的な範例化という作業を行う必要がある」

（似田貝 1974: 7）というものです。ただ、論文はここで終わっているため、はっきり言ってよくわからないわけです。「個別・具体的な範例化」とはなにかということもよくわかりませんし、「コミットメント」とはなんだろうかということになります。「コミットメント」と言われると、被調査者と調査者が同一主体になって、一緒になにかを共同で調査することではないかという感じにも読めてしまうので、実際そう読んでしまった中野がいるわけですが、そう読まれてしまうのも仕方がない部分はあったと思います。それで中野は、そんな簡単に被調査者を理解してわかったつもりになるなよと批判するわけです。調査者というのは被調査者から教えてもらうものであって、調査者が被調査者と一緒になってなにかやるなどというのは傲慢だということです。「調査地区の住民たちに、もし我々が『共同行為』などという言葉を使ったら、〔中略〕彼ら公害地区住民は、我々をはねつけたろう。甘ったれるな。あるいは丁重にこう言ったかもしれない。思い上がらないで下さい、と」（中野 1975: 5）、『共同行為』などと呼んでいい調査ができるとは、とうてい思い込めない」（中野 1975: 6）と論文²のなかで書かれています。しかし、それは誤解で、似田貝はそういうつもりで言っていたわけではないんです。中野

² 中野卓, 1975, 「社会学的調査と『共同行為』——水島工業地帯に包み込まれた村々で」『UP』33: 1-6.

の文章を読んでみると、調査者は問いを発し、被調査者は問いを受け止め、被調査者も認識を新たにするような相互作用が大事だ、あるいは、火花の散る触れ合いみたいなものが大事だ、異質性の認識が大事だということを言っていて、これは実は、似田貝が言っていることとほとんど同じです。「共同行為」という表現が問題だっただけで、基本的に中野と似田貝の間には論争というほどの対立点はなく、その立場はかなり近いものだったと思います。社会学史的にも、そのように捉えられていると思います。

これは完全に余談ですが、似田貝先生に以前、「なぜ直接言い返さなかったのですか」と聞いたことがあります。これは誤解じゃないですかと。ご本人は、「いや、あのあと、中野先生のゼミに呼ばれて、僕、話したんだよね」、「だから、別にそんなにやる必要もね・・・」みたいなことをおっしゃっていました。中野先生も、自分の弟子とあまり年齢が変わらない似田貝先生をすごく評価されていたみたいで、その意味では、ご本人たちの間では誤解は解けていたわけです。今日の報告のなかで、社会学史的にはこの点が一番重要な点ではないかと思いますが（笑）。ただ、「社会調査は今が曲がり角なんじゃなくていつも曲がり角にあるんだよ」と、中野先生は思っていたようで、その点は意見が合わなかったようです。「若い者はいつも『今がピンチだ』って言うけどいつもピンチだよ」ということを、中野先生は言われていたみたいです。そこでズレはあったようですが、ご本人たちの間では、激しい対立をしているというようなことではなかったようです。

「似田貝-安田」論争だったのではないかな？

このように、実際には論争は起きていなかったのですが、さきほど申し上げましたように、突然、そこに安田が出てくるわけです。「似田貝-中野論争」という言葉を安田が作り出すことで初めて社会学史的には「論争」が誕生することになります。

安田は、『社会調査』と調査者-被調査者関係³という論文³のなかで、「論争」のポイントとして以下の点をまとめています。1つ目は、データの処理と利用が権力に絡めとられていくこと。2つ目が、科学的調査は現実の不確定要素・住民の側のリアリティを切り捨てた水準で成立していること。3つ目が、調査組織が巨大化するとともに、調査過程がブラックボックス化していくこと。このように3つにまとめるわけです。この3つ目の点については、安田はあまり詳しく論じていませんが、これは、さきほどの解題報告にあった調査主体の実際というところ、いかに調整をしていくかというところの問題と重なってくると思います。こうした問題は今になって出てきたわけではなくて、当時も少なからずそういう問題が潜在的にはあったということだと思います。

安田が焦点を当てたのは1つ目と2つ目の問題だったわけですが、1つ目については、要は、「似田貝も中野も権力者・調査者・被調査者というアクターがいる状況だけを問題にしているけれども、必ずしも権力が介在しない場合もありますよ」ということを言っています。2つ目については、中野が誤読をしているということを指摘しています。安田の整理で重要なのは、単に安田が似田貝の側に立っているということではなく、「共同行為という構想も不可能だ」と指摘している点で、これが今回読んであらためて面白いと思ったところです。ただ、似田貝が「共同行為」という言葉で言いたかった基本的な理論的背景の問題は、「社会調査が主体-客体を分離させた認識のもとに成り立っているけれども本当にそれでよいのか」ということであっ

³ 安田三郎, 1975, 「『社会調査』と調査者-被調査者関係」『福武直著作集 第2巻』東京大学出版会: 488-499.

たはずだと思うんですが、そこを安田が重要な論点としてとりあげていなくて、その点はすごく不思議なまとめ方であるように思います。そこには、少なからず偏りがあったと思います。

安田による似田貝批判は次のようなものです。似田貝は「共同行為」という調査の手法でリアリティを押さえつつ、「個別・具体的な範例化」ということで普遍的に適用可能な法則を目指しているけれども、しかし、リアリティを押さえることと、どこでも適用可能な法則を両立することは無理だ、という批判です。安田の論文からの引用になりますが、「彼は『個別・具体的な範例化』といっているが、やはりこれは明らかに法則定立をめざしていることに外ならない。普遍化は瑣末なリアリティを捨象することによってこそ、広範囲に適用可能な法則に達しうるのであって、リアリティの考慮はその適用の際にこそ行われるべきなのである。両者を同時に行うことは私には原理的に不可能のように思われる」（安田 1975: 493）と。

これは、本当にそうなのだろうか。それこそが論点だと思います。ただ、安田の側に立つと、似田貝の「個別・具体的な範例化」が一体何なのかよくわからないため、このような批判をしたという側面があるとも思います。似田貝は、この批判に対しても直接的には応答しませんでしたので、事実上、「論争」は終結します。

だけでも、この「個別・具体的な範例化」というものを、その後、現在に至るまで、似田貝はずっと考えて肉付けしてきたのではないかと私は考えています。その意味で、安田の批判に対応してきているのかなと思います。その後、多くの偉い先生方が「似田貝-中野論争」の研究をされていますが、その点についてはあまり論じられていないのではないかと思いますので、このあと見ていこうと思います。

「似田貝-中野論争」のその先：「共同行為」とはなにか？

「似田貝-中野論争」は、これまでも多くの論文⁴で言及されてきました。本当に、どれも素晴らしいまとめで、私が付け加えることは特にないのですが、「論争後の似田貝」については、あまり言及していないように思います。

では、似田貝がその後、どのようなことをやっていったのかといいますと、1970年代から1980年代は住民運動を研究していたわけですが、阪神・淡路大震災が起きてからは、この阪神・淡路大震災や東日本大震災など、震災支援のようなものに研究対象が変わっていきました。ただ、対象は変わっていったけれども、手法のようなものは基本的には変わらなかったんじゃないかと思っています、それが「共同行為」だったと思います。

では、似田貝の「共同行為」とはどのようなものだったのかを考えると、ひとつは「過程的主体」に着目するものだったのであろうと思います。つまり、主体＝人が変わっていくさまを、一緒に現場を共有するなかで描き出していくことが、ひとつの狙いなんだと思います。それは、リアリティを重視しているのと同時に、その事例だけにとどまらずほかの事例でも起こり得る話として、もちろん、あらゆるところで起こり得るとは想定していないとは思いますが、

⁴ 佐藤健二，2000，「社会学の言説——調査史から問題提起」栗林彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知3 言説——切り裂く』東京大学出版会：135-159；桜井厚，2003，「社会調査の困難——問題の所在をめぐって」『社会学評論』53(4)：452-470；松田素二，2003，「フィールド調査の窮状を超えて」『社会学評論』53(4)：499-515；井腰圭介，2003，「社会調査に対する戦後日本社会学の認識転換——『似田貝-中野論争』再考」『年報社会科学基礎論研究』2：26-43；森下直紀，2010，「水俣病における『不知火海総合学術調査団』の位置——人文・社会科学研究の『共同行為』について」山本崇記・高橋慎一編『「異なり」の力学——マイノリティをめぐる研究と方法の実践的課題』生存学研究センター報告，14：319-348。

ある程度はほかの文脈でも適用可能なひとつの思想や概念として、提示していこうとしているのではないかと思います。

中野との違いも、まさにこの点に出ているのだろーと思います。中野の本をお読みになった方はわかると思いますが、ものすごくリアリティ重視で書かれています。むしろリアリティしかないというか、そのくらいリアリティを重視したライフヒストリーです。その意味で、似田貝とすごく距離が近いですし、しかも、2人ともそのリアリティから社会構造みたいなものをえぐり出そうとしている点でも、すごく立場は似ていると思います。ただ、あまり言われていないと思いますが、中野と似田貝では、構造の捉え方が少し違うのではないかと考えています。

中野は、人々の語りから、既にできあがっている生活秩序とか文化とか、そういうものをえぐり出そうとするので、「教えてもらおう」というスタンスになるのだと思います。だから、「共同行為」批判の時にも、そういうことを言っていたんだと思いますけど、似田貝の場合は、既にできあがっている構造というよりは、変化する構造を捉えようとしていたんじゃないかなと思います。特に、運動主体がどう構造を変えることができるのか、変えようとしているのかということに興味があって、だから、人々が動き出していくさま、主体が変わっていくさま、それがどう構造に影響を及ぼすことができるのかということに関心があったので、「人」にすごく興味があったんだと思います。その場合は、「教えてもらおう」ということだけではなくて、そこで一緒に、その人があまりうまく言葉にできていないようなことを一緒に言語化していくというようなことも大事になっていったんじゃないかなと思います。そういうところで違いがあったのかなと思いました。

「共同行為」のもうひとつのポイントは、言葉に着目するということにあります。似田貝の最近の研究を読むと、これまでの文脈を知っていると「ああ、なるほどな」と思うんですけど、やはり少し難解で、ここの試みがあまり理解されていないような気がします。私が思うには、おそらくこれは、これまでの「共同行為」の文脈のなかで作られてきた研究なんだろうということです。似田貝は人々に着目して、人々が使う論理とかキーワードとか、そういうものがどういう体系になっているのか、それはどのような社会的背景のもとで出てきたのか、たとえばその人のどのような経験のもとで出てきたのかということ、つづきを見ていくわけです。このようなかたちで「経験の思想化の過程」を明らかにすることで、リアリティと法則定立の両立を目指したのだろーと思います。

そして、単に一回話を聞いただけでは、その人が使う言語体系を明らかにすることはできないので、それを明らかにするためには、ある程度長期的な関係性を持たなければいけませんし、その本人自身もその言語体系を「こういうふうになっているんですよ」とうまく説明できるわけではないので、常に討議を介して、「それは、どうしてそうなっているんですか」とか、「それはどういう意味ですか」と問わないと、うまく描き出しにくい部分があります。その意味で、「共同行為」がひとつ重要になっていったんだろーなと思います。

まとめますと、似田貝の「共同行為」の特徴のひとつは、「コミットメント」ということです。これは1974年の段階でも言っていて、その時点ではあまり明示していなかったのですが、これは簡単に言ってしまうと、「同じテーマを共有する」ということだと思います。たとえば、「この都市問題を解決するにはどうすればいいんだろーか」とか、「震災から復興するためにはどうしたらいいんだろーか」とか、「避難者の問題をどうすればいいのか」とか、いろいろとあると思いますが、それを調査者と被調査者が一緒に共有するということです。これは、中野が誤解したように、「一緒に住民運動をしましょうね」とか、「一緒になにかやりましょうね」ということでは必ずしもない。ときには、そういうことはあるのかもしれないけれども、必ずしも「絶

対一緒に何か同じ実践をしろ」と言っているわけではないということです。さらに言うと、必ずしも「同じ時空間に居合わせろ」ということでもないんだと思うんですね。たとえば、同じテーマを共有して、研究者は研究者なりに大学でこの問題について考えていく一方で、支援者は現地でなにか支援をしているという役割関係のもとで、同じテーマを共有していれば、同じ時空間にいる必要は必ずしもないということも言っています。

2つ目は「討議」です。研究者は自然言語の意味をすぐに理解することはできないので、それを問うたりして描き出すことになるのかなと思います。たとえば、「それはメタ的に言うということですか」という聞き方もあるだろうし、「いや、これはこういうことなんじゃないですか。ちょっと違うんじゃないですか」みたいな反対意見を出すことで、その人の言いたいことをよりはっきりさせることもあるし、いろいろとあるのだと思います。

そして、3つ目は「言語化」です。2つ目と重なるんですけど、人々の言葉には、その言葉の文脈や多義性というものがあるので、それがどのような文脈で作られているのか、どのような意味が重層的に込められているのか、そのリアリティを明らかにしていくということです。そうしたものを積み上げていくことで、調査者と被調査者の間で「共時化」することができる。つまり、同じ時間を過ごしてきたわけではないけれども、相手の言っていることがわかるようになるということです。たとえば、1回話を聞いただけで、ポロっと出てきたキーワードを調査者は本当に理解できるかという、理解できる人もいるかもしれないけれども、その言葉がどういう文脈で使われたのかということを真摯にリアルに押さえていかなければ、本当にわかったことにはならないわけです。それを似田貝は、5年10年と時間をかけて、その言葉の意味をできるだけ理解しようとしてやっている。おそらく、調査者が被調査者のことを完全に理解することは、あり得ない。けれども、できるだけ理解できるようにしようとしている。そのようなかたちで「共時化」を目指す。調査者と被調査者の間で「共時化」ができれば、その調査者が作りだした分析を読んだ幅広い読者も、その被調査者のことをより理解できるようになる。つまり、そこでも「共時化」が可能になる。これが「共同行為」の方法論的な展開ですね。対象は微妙に変わってきていますが、基本的な方向性は変わらないのかなと思っています。今の話は、たとえば『自立支援の実践知』⁵にも展開されていると思います。図1は、震災現場で支援をしている人たちの言葉の変遷をテーマごとにまとめたもので、少し見づらいと思いますが、言葉が変化していくのを、「これはこういう意味だ」みたいなかたちで、聞いたり聞き直したりしてまとめたものです。

現代における「共同行為」に関する論点

以上が、「似田貝-中野論争」についてお話ししたかったことですが、この「論争」を現在の文脈に引きつけて考えると、次のような点が論点になるのではないかと、私なりに思っています。つまり、研究者の立場性、研究をいかに還元するのかという問題、共同行為をおこなう際にそれぞれ役割をどう設定するのか、自分で役割を設定できるのかという問題はあるとは思いますが、こうした論点があるかと思っています。

もうひとつは、主体-客体図式から離れて、どのような聴きとり調査をおこなうことができるのかということです。この論点は本当に重要な論点だったと思いますが、実は、その後あまり省みられてなかったのではないかという気がします。対応策はいろいろとあり得るだろうと思います。似田貝の場合は、「コミットメント」・「討議」・「言語化」だったと思いますが、それ以

⁵ 似田貝香門編、2008、『自立支援の実践知——阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂。

外にもあり得るだろうと思います。

以下は私の話になりますが、私自身は、必ずしも「共同行為」を最初から実践してやろうと思ってはいませんでした。ですから、今日のパネリストとしてふさわしいのかどうか、ちょっと自信がありません。あと、『『共生』の都市社会学』⁶も、あたかも「最初から共同行為を考えていました」みたいな感じのスタンスになっていますけど、申し訳ないのですが、実はそうでもありません。ですから、ちょっとこれまでの話とずれる部分がありますが、ただ、実際に現場へ入っていくと、似田貝が「論争」のなかで言っていたテーマには、少なからず対峙せざるを得なかったわけですね。やはり、すごく重要なテーマだったんだと思います。

⁶ 三浦倫平, 2016, 『「共生」の都市社会学——下北沢再開発問題のなかで考える』新曜社.

要だと主張するわけだけでも、本当に利便性や防災性を考えるのであれば、地下化したあとで残った鉄道跡地をオープンスペースとして有効利用すればいいわけです。だけれども、結局その跡地の多くは商業施設になろうとしていたりして、バリアフリーでもなく、防災性も高くないというところで矛盾が生じていて、それに対して反対する人たちが出てきたわけです。私は、その都市計画に反対している人たちを主に研究対象にしていたので、似田貝が「社会調査の曲がり角」論文で明らかにしたように、私自身も研究者としての立場性がすごく問われました。「第一に、住民運動参加者の、研究所や研究者に対するかなり強い不信感。第二に、研究者や調査主体の、〈ISSUE〉へのかかわり方の、執拗なまでの問い。第三に、住民運動参加者の、研究者や調査者への情報・知識の要求」（似田貝 1974: 1-2）といったことは、私の場合も、そのまま問われたということがあります。

特に反対運動をしている人たちは高学歴で非常に頭がよくて、同時に、社会科学に対する批判意識もすごく強かったんです。「社会学はなにをやっているんだ」ということをすごく言われました。「なにをやっているの？ 専攻はなんなの？」と聞かれて「社会学です」と答えると、「社会学ってなにをやっているの？」、「社会学自体はこの問題をどう考えているの？」みたいなことをすごく言われました。「この調査は私たちにとって何になるの」という批判も、当初はありました。同時に、「都市計画に対してどう考えているの？」ということもすごく聞かれました。それに対して、「別に賛成でも反対でもないです」、「ちょっと状況を知りたいので教えてください」みたいなかたちで調査を進めていくことも、おそらく可能だっただろうと今でも思います。ただ、それだと通り一遍の話しか聞けないのかなという気もしていました。誰にでも言っているようなことをまた聞かされるだけなのかなと思ったんですね。

また、一方的に外部から来て外から分析するだけでいいのかなと、もう少し詳しく彼ら彼女らの主張の意味を深く理解したほうがいいんじゃないかなとも思いました。そのためには、やはり関係性を持たなければいけないと思ったんですね。今日のテーマにもなると思うんですけど、調査者-被調査者関係というのは、作ろうと思えばいくらでも作れるわけですけど、その関係性を、より深い関係性にしたいというか、あまりうまく表現できませんが、もう少し、より詳しい話を聞き出せるような関係性になりたいなと思ったんです。

私自身も、こんなよくわからない不合理な都市計画がなぜ止まらないのだろうかと、そもそもそれが不思議だったので、「都市計画に反対です」という立場をそこでとるようになったわけですね。それで調査をするようになったわけです。この点も今日のテーマと重なるのかもしれませんが、そこである意味、自分のなかでスイッチが入るというか、そこで見えてくる世界も変わっていきました。そして、都市計画の問題とか、地域の権力構造とか、運動の課題とか、そういったものをより積極的に考えるようになりました。テーマを共有することで、調査者も変わることがあるということです。

実際、都市計画の問題をどうにかできないだろうかというかたちでテーマを共有していた人たちは、やはりすごく関係性を持てたし、深い話も聞けるようになりました。下北沢の場合は、計画を進める側の人たちにも、「これは本当は問題なんだけどね」という立場の人が圧倒的に多いということを聞きます。でも基本的に、みんな、「もう決まっちゃったことだから」というスタンスなんです。ですから、「都市計画に反対です」と言っても、「それは、まあ、わかる」という人が一定数いて、その立場をとりやすかったというのもあるんですね。特に推進派の商店街の会長さんなどは、とても寛容な人で、「反対です」と言っても怒ることは全くなくて、「だけどね、これを進めないよね」みたいな感じで説得に入ってくるわけです。中立的な立場で聞いていたときよりもすごく深い話が聞けるようになって、それは立場を示したことによって引

き出せた話かなと思います。

ただし、すべてオーケーだったかという、それは必ずしもそうではなくて、テーマの共有の境界性みたいなものがやはりあって、特にあまりうまく関係性を持てなかったのは、行政と一緒に協働していこうという運動主体でした。そういった人たちとは、あまり関係性を作ることができなかったなど、今でも思っています。その人たちも、「話を聞かせてください」と言えば絶対に話を聞かせてくれるんですけど、ほかの人たちと比べると、あまり深い関係性を築けなかったかなと思います。もちろん、出した論文に対して、批判のメールが来ることもありました。それはそれで良かったのかもしれないんですけど、そういうこともありました。

話を戻すと、このような状況というのは、「似田貝-中野論争」のときには、そこまで考えられていなかったのではないかと思います。あの時点では、「権力 vs 運動者と研究者」という、ある意味で二項対立だったと思うんですけど、さきほどの解題報告にもありましたように、今はそんなにシンプルな状況ではないと思います。解題報告でのお話は、そもそも研究者が自律的なものなのかということだったと思いますけど、被調査者もひとつの立場に収斂していくわけではないし、そもそも昔ほどシンプルに、敵対する権力というものを実体的に設定することも難しいだろうと思うんですね。そこがひとつ論点ではないかと思いました。

社会学固有の調査とその還元

次に、社会学固有の調査とその還元という話です。当時は、私が院生だったからということもあるでしょうけれど、似田貝先生みたいに「共同行為」を呼びかけられることは全くありませんでした。「私は反対です」という立場を明確にしても、「共同行為」という感じにはならなかったという印象があります。今振り返ると、私自身も、この問題に対して社会学はなにができるのかということ自分をあまりよくわかっていなかったし、被調査者自身も社会学になにを期待すればいいのかわからなかったということが影響しているのかなと思うんですね。たとえば、下北沢には都市計画や都市工学の人たちもよく調査に入っていて、そういう人たちは、住民のいろいろな思いやニーズをワークショップ開いて絵などを作って、「こういうプランがいいですよ」みたいな感じで代替案を出していきました。そういうのは、ひとつの還元だと思いますし、わかりやすい。だけど社会学は、そういう技術知を持っているわけではなくて、持っている人もいるのかもしれないけれども、基本的に社会学者はそういう技術知を持っていないと思うんです。そういう場合、被調査者もなにを期待していいのかわからないだろうし、社会学者の卵も、「自分はこれを還元できます」というようなことをどう言えるのかという問題があったと思うんです。ですから、今日のもうひとつの論点としては、社会学固有の調査とはなにか、社会学はなにを社会調査で還元できるのかという論点が、ひとつあるのではないかと思います。

このような話をすると、「今は学際性の時代だから、そのようなかたちでディシプリンにこだわるのはやめたほうがいい」と言う人もいるかと思います。それもそうかという気もしますが、うまく説明できないんですが、自分が今いる学部は都市科学部といって文系と理系が一緒になってやっている学部で、そこでは異分野融合とかいろいろとありますが、そのときに、それぞれのディシプリンの境界線をなくすことが学際性なのかと、ちょっと思うわけです。やっぱり学際性というときには、別のディシプリン同士で対話をしていくなかで、それぞれの境界線みたいなものを広げたり連携したりすることが大事ではないかと思うので、やはり、社会学にはなにができるのだろうか、というかたちでディシプリンにこだわることも頭の片隅に置いておいたほうがいいのではないかなと思うんですね。それを全く気にしないなどと考えてしまう

と、元も子もないのかなと思ったりするんです。それも、ほかの先生方がどう思われるか、あとでお聞きしたいと思いました。

ちょっと脇道に逸れてしまったので、話を元に戻します。最初は、自分になにができるのかとか、どう還元できるのかということが本当にわからなくて、とりあえず記録をとることかなと思って調査をしていました。本当にそれがよかったのかどうかはわかりませんが、調査を続けていくなかで、自分なりに思ったのは、社会学は被調査者の認識とか、認識の変わりよう、認識の形成みたいなものを問題にできるという特徴がひとつあるのかなと思いました。「人類学もそうなのでは？」と言われると、そういう気もするのですが。どのような状況を問題としてかれらは認識し、どのような社会を構想しようとしているのか。つまり、既存の社会の問題を人々がいかに捉え、新たな社会をいかに構想するのか。これは社会学の根本的なテーマなのではないかと思ったんですね。その認識は、被調査者自身も常に意識しているわけでもないし、うまく説明できるようなかたちで言語化できるものでもないで、研究者との議論を介して「こういうことですか？」という感じで引き出してもらいたいなことも必要になってくるので、その意味で、調査者は役に立つ部分もあるのかなということを思いました。さらに言うと、そういった認識は、ひとつだけとは限らないので、どのような認識がどのように分立しているのか、どのように分布しているのかということを明らかにすること、さらに、なぜそうした認識があるのかという社会的背景みたいなものを押さえていくことは、その地域にとって、その後の活動や運動にとって、参考資料になるのではないのかというかたちで、研究を位置づけるようになりました。それが本当に還元になるのかというと、ちょっと自信はないんですけど。

今日のひとつの大きなテーマは、調査の還元についてだと思いますが、自分はあまり還元できている自信はないんですけど、『「共生」の都市社会学』を出してから、すべての被調査者にお渡しして読んでいただいて批判をいただいたんですが、そのなかの肯定的な評価のひとつに、「歴史的な資料の価値がある」ということを言うてくださったものがありました。特に、「あいつの考えていることがよくわかった」、「あいつが、なぜあのとき、ああいうふうに分れていったのかわかった」とか、計画を進めている人について「なるほど、こういう背景があったのかということがわかった」とか、ある意味で相互理解を促進させるような役割を少しは果たせたのかなと思っています。それを「よかった」と言うてくださる方が何人かいて、結構多かったことは、ちょっとうれしかったことです。それはよかったなと思います。そして重要なことは、よりよいまちづくりにつなげていくことで、事後的に調査の成果にしていけることではないかなと思います。

今お話しした内容は、下北沢地域や被調査者への直接的な還元の話ばかりですが、調査の還元というのは、それだけでもないだろうと思っています。その調査が、別の地域にとってその後参考になるような知見を提供していたら、それもまたひとつの還元なのかなと思っていて、それは、下北沢地域の運動をしている人たちもいつも言っていました。「自分たちが、どこまでやれて、どこまでやれなかったかということを、ちゃんと歴史的な資料として残していくことが、同様の問題を抱えた地域の人たちにとって、なにか役立つ参考資料になるだろうし、それをまとめてくれたのはありがたい」ということを言うていただけましたので、そういう還元のあり方もあるかなと思いました。

おわりに

最後に「まとめ」です。あまりたいしたことを言えていなくて申し訳ないのですが、3つほど論点を考えました。

ひとつは、なんらかの権力性というか、なんらかの権力が問題を起こしているような現場においては、「その調査はどのような立場でおこなわれるのか」とか、「どのような意味があるのか」ということが、今後ますます問われてくるだろうと思います。調査者・研究者は、一応ひととおりの説明をするでしょうけれど、それが形式的であればあるほど、被調査者との関係性は形式的なものになっていくだろうと思います。

そして2つ目です。社会調査の成果を被調査者や地域社会に還元する際に、技術知を持たない社会学はどのように還元をしていくことができるのかということが、今後の重要な論点になってくるだろうと思います。おそらく、似田貝の「共同行為」という構想も、社会学になにができるのかという論点とも関連していたのだろうと思います。似田貝は、そのひとつの方法として、従来の主体-客体図式から離れて、テーマを共有し、被調査者と長期的に議論をしながら、その人の言葉・思い・認識を丹念に描き出すという「共同行為」が重要性を持ってくるだろうということを言っていたのではないかと思います。

ただ、かつての「共同行為」論は、さきほども申し上げたように、権力に対峙する調査者と被調査者という、ある意味でシンプルな構図だったと思います。しかし、昔ほど権力というものを実体化できるような状況でもないと思いますし、それこそ Michel Foucault 的な権力観みたいなものを考えていったときに、非人称の権力がどんどん進展しているし、被調査者も必ずしも特定の立場に収斂しないし、本当に事態はすごく複雑化していると思います。調査者自体についても、自律的な調査者を想定できるのかという問題もあると思います。こうした状況下で、研究者が「共同行為」を志向するならば、昔は簡単に被調査者と組むことはできたのかもしれないけれども、今はなかなか難しいだろうと思います。誰と、なぜ、その「共同行為」をするのか。なぜ、そのテーマを共有するのかという自らの立ち位置を明示化していく必要があるのかなと思いました。これが、3つ目の論点になるのではないかと思います。そうは思わないという人もいるとは思いますが、論点になるのではないかと思います。

少し長くなってしまいましたが、以上が報告となります。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

植田：ありがとうございました。少し時間は押していますが、事実確認などがありましたら、この時点でお出しいただければと思います。特に、登壇者の間で確認しておきたいことがあればと思いますが、いかがでしょうか。

特に出ないようでしたら、このまま林さんの報告に移りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。